

## 原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和元年11月20日（水）14：30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：更田委員長

### <質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属と名前をおっしゃってから質問の方をお願いいたします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。ヨシノさん。

○記者 テレビ朝日、ヨシノです。よろしくお願いします。

泊原発についての15日、先週の現地調査について、言及が委員会の場でもありましたが、基本的にはおそらく、私の勝手な考え方なのですけれども、F-1断層はMIS9の下の方であって、その下層から上層への連続性が認められたということから考えると、普通に考えたら、十分に古い断層だと考えるのが一般的ではないかと思うのですけれども、委員長はどのようにお考えになられますか。

○更田委員長 これは石渡委員がぶら下がりの際にもお答えになっているし、今日のやりとりでも言及がありましたけれども、連動している、ここが一つ共通理解になったわけですけれども、その上に渡っている上載層と呼んでいるもの、これの年代が特定できれば判断することができるだろうなど。

今までとにかく、皆さん御承知のように、泊のこのF-1断層は随分時間がかかってきたわけけれども、率直に言うと、トンネルの中にいて出口が見えない状況ではあったけれども、今は何しろ露頭が出ているわけですから、出口が見えてきたであろうと。ですから、非常に大きなステップだったのだと思います。

あとは、これはもう北海道電力の側も十分に理解していたことだと思いますけれども、改めて上載地層の年代に関してデータを整理してほしいということを伝えてある。北海道電力はおおよそ2～3か月後には示せるということですので、かなりの確からしさでその時点で判断ができるようになると見ています。

○記者 2～3か月といいますと越年は必至ということになりますけれども、その後、審査会合をやって、もう一度データが拡充されたものを含めての審査会合をやっての判断ということになりますよね。

○更田委員長 それはもちろんF-1断層の年代、動いた年代に関して言えば、審査会合でもう一回申請者から説明があつて、その上でということですが、審査全体を見れば、その上で、今のは敷地内破砕帯の話ですけれども、まだこれからSs、設計基準地震動を

作らなければなりませんし、ですから、もちろんF-1で黒となったら、そこでもうその後のことをする必要はなくなるわけですが、そうでなければ、次のステップとして設計基準地震動の設定、それから、プラント側も一通りの審査はプラント側は済ませてはいるのですけれども、設計基準地震動が大きく変わりますから、防潮堤の構造等をはじめとしてプラント側の審査を始めなければならないだろうと。

いずれにしろ、今申し上げているようなことは、F-1断層についての結論を得てからということになると思います。

○司会 それでは、フジオカさん。

○記者 NHKのフジオカです。

先ほどの泊原発の質問に関連するのですけれども、そうなりますと、例えば敷地内の破砕帯、地盤の評価について、めどが立ってきた場合、次、プラントの審査というのはどのあたりから始められそうという見通し、かつて評価にかかわっていらっしやっただとして、プラントの評価。

○更田委員長 どのあたりというのは、どういった分野についてということですか。

○記者 スケジュール感として。

○更田委員長 時期ですよ。それは何とも。というのは、敷地内破砕帯について結論が出て、敷地内破砕帯は十分に古いものであるということが確認できたとすれば、今度、地震・津波部門の方は、先ほど申し上げたように、設計基準地震動の設定に入っていくと。

設計基準地震動が固まる少し前からプラント側の審査を始め出しても、そう無駄にはならないと思うのですけれども、それにしてもちょっとどうだろう。設計基準地震動を作るのもそんなに短い期間ではないと思いますし、それから、あくまでそれは申請者側が出してくるもの、今までいくつかのサイトの設計基準地震動を見ておられると思いますけれども、数本でシンプルなものもあれば、非常にたくさんのケースもありますし、それは北海道電力の対応にもよる。最も早くても夏ごろではないですかね。ちょっと余り確かなことは申し上げられないですね。

○記者 あと、今日、定例会の最後の議題の外の話題で今回の現地調査に触れられたというのは、何か委員長としても関心の高まりといった、そういったところがあるのでしょうか。

○更田委員長 まずは、あれだけの悪天候でしたから、そもそも空振りでも、もちろんぶら下がり取材もあったし、それから、委員会の中でも会話はしていますので、知ってはいたわけだけでも、公の場で、あれだけの悪天候の中、現地調査に行って、成果があったのか、なかったのか、石渡委員としてどういう見解をお持ちになったかというのを公開の委員会の席上で交わしておくということがフェアかなと思ったと、そのぐらいです。

○司会 それでは、右の列の後ろの方。

○記者 北海道新聞のヨネダです。

先ほどの泊の関連なのですけれども、先ほど出口が見えてきたみたいなお話をされていて、北電が出してくるデータによると思うのですけれども、次回の審査会合で、F-1断層については、一定の結論を出せそうという理解でいいのでしょうか。

○更田委員長 あくまで北海道電力の説明ぶり、それから、整理されたデータの充実度によるわけですが、きちんと整理をしてくれば、一番早くて次の審査会合、もう一回やりとりがあるとするとその次ぐらいですけれども、そのあたりでF-1断層については判断ができると思っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほか、ございますでしょうか。フクチさん。

○記者 朝日新聞のフクチです。

先週、福島第一の事故調査の連絡調整会議がありまして、その中で今後の調査スケジュールの見通しというものが示されました。その中で、ベントに関して一番最初に着手をするというのがありまして、今、規制基準の中でもベントが要求の一つになっていて、今後、調査結果の反映ということもあり得るから、一番先にやられるのかなと思ったのですが、委員長のお考えがありましたら教えてください。

○更田委員長 まず最初にそこに取りつく理由は、今、一番データを得やすいところに、というのは、ベントは全体の流れの中で下流側にありますから、今は御承知のように1、2号機のスタックを切っていますね、上から。1、2号機のスタック、スタックの根元の部分はいまだに線量がすごく高いのですけれども、SGTSの配管であるとか、そういった系統のところへ近寄って線量等がはかってこられるようになったし、それから、かつて備えた耐圧強化ベントも、ラプチャーディスクであるとか、そういったところを調べることができるようになってきたので、そういった意味で、何から手をつけるかという、重要度だけではなくて、重要度だけだとほかにもいくつかあるのかもしれないけれども、とても新たなデータが得られそうにないものには手がつけられないし。ですから、価値のあるデータなり知見が得られそうで、かつ規制上学ぶところの大きい重要度の高いところという、そういったバランスで選択したのが、今回、ベントのところについて見てみようということです。

○記者 今の話で関連して、この間示された調査の項目の一つとして、有効ベント回数の推定というものが入っていて、調整会議の中でも、どういう方法であればその推定ができるのかという議論が少し出たのですが、その点、今後の検討会での議論にはなるかもしれないのですが、委員長のお考えとして、推定方法というのを何かイメージお持ちでしたら教えてください。

○更田委員長 これはなかなか難しいですね。というのは、推定で終わってしまうと厳し

いところで、現物を見ることによって何らかの、あるいはこれまでわかっているデータを見ることで、それが推定ではなくて、推定というか、シミュレーションではなくてと言うところまで踏み出せるかどうか。おそらくこうだっただろうと言うところまで行けるかどうかですけれども、なかなか難しいかもしれないですね。

○司会 ほかほございますでしょうか。ヤマグチさん。

○記者 プラッツのヤマグチです。

たびたび議論になっている例の1Fの処理済水、トリチウム水のことなのですが、御存じのように月曜日に経産省が数値データを出したと。試算値としてですね。まず、データ自体に対して委員長の受けとめと、これをもってして、結論としては、大気と海洋放出の場合の被ばく線量の試算値なのですが、少し議論は動くという行方をお感じになりますでしょうか。この二つ、お考えいかがですか。

○更田委員長 まず、報道されている試算については、担当課に前提と計算方法について説明を指示したところなのですけれども、私は詳細な部分はまだ聞いていないので。ただ、いずれにせよ、規制基準を満足する形で放出されるケースにおいて、その影響は極めて小さいというのは、そもそも規制要求を定めるときに影響が出ないように、健康等に影響がないように規制基準が定められているので、当然それを守る形で放出される限りにおいて影響が出るはずがないのですが、一方、これは規制からやや離れるけれども、処理済水の処分に関して、最も懸念があるとすれば、たびたび言及をされている風評被害であって、そうしたときに、大気なのか海洋なのかというのは非常に大きな論点になるところだろうと思います。スリーマイルアイランド、TMIの2号機の場合は、あれは川だったものですから、川への放出ではなくて、上流等で大気へ放出するという形をとりました。それはそれぞれのケースでの判断があるのだらうと思います。議論は進捗しているというか、前へ進んでいるものだと思いますし、そういった影響評価に関する試算が示されたというのは一つのステップだらうと思いますけれども、申し上げたように、風評被害であるとか、さまざまなインパクトについて、多面的に、総合的に判断をされているところだと思いますので、どの時点で意見が集約されるかについては、見通しを私から申し上げることはできないですね。

○司会 ほかほございますでしょうか。よろしいですか。それでは、最後、フクチさん、どうぞ。

○記者 2度目で済みません。朝日新聞のフクチです。

先ほど聞き漏らしたところを1件、1F事故の調査について、以前、国会でも御答弁されていたと思うのですがけれども、雑誌の記事等で、津波よりも先に地震の影響で重要機器が壊れたのではないかという話で、「文藝春秋」の記事ですけれども、流量がとまっていたという話について、委員長は、特段、今の時点でこれまでの見解を覆すようなもの

ではないというお考えを述べられていましたけれども、そうした個別の観点だけではなくて、広い意味で地震の影響があったかもしれないという話が今後、事故調査の中で出てきた場合は、そこにはもちろん調査を進めていくという考えはあるという理解でよろしいでしょうか。

○更田委員長 それはもちろんのことで、もともと「文藝春秋」の記事以前から、余り固有名詞は挙げませんが、津波で電源を失う前から地震による影響があったのではないかとおっしゃる方、主張される方はあって、これまでもそういった主張はあったわけです。中間報告までの限りにおいて、そういったものは裏づけられなかったというのは、今の時点で私たちが持っている結論ですけれども、当然、津波で電源を失う前に地震の影響があったか、なかったかということに関して、新しい事実なり、推論を組み立てるような材料が出てきたときには、それは当然重要なことですから、私たちもそれについて見ていくけれども、「文藝春秋」の記事は、炉心流量という一つのパラメータにスティックしてしまっていて組み立てられているもので、全体のデータの中で整合がとれたものにはなっていないので、国会での御質問もあったわけですが、私たちとしては、優先順位を高く置いて、解析を加えたりしなければならないものだと考えていなくて、また、さらには、雑誌等々での記事に限らず、1F事故についてはさまざまな方がさまざまな推測や推論をおっしゃっていて、当然、私たちもそれはモニターしているわけだけれども、やはり優先順位を誤ってはいけないと考えていて、繰り返しますけれども、おっしゃるように地震影響に関して、これだけ時間がたって、中が見られるようになって、どのようなデータがというのを、余り過度な期待は持てないですけれども、もしそのようなものがあれば、当然そこへ高い関心を払っていくことになると思います。

○司会 それでは、本日の会見は以上としたいと思います。お疲れさまでした。

—了—